

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第144号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成18年6月21日

サンショウクイ



2006. 5. 9 札幌市豊平区西岡公園

撮影者 荒木良一 (札幌市東区)



も く じ

伊達市にてサンカノゴイ 保護した鳥達が教えてくれたこと(1)	伊達市 篠原 盛雄	2
礼文島 レブンクル自然館	宮本誠一郎	3
北海道におけるヒバリの繁殖期の分布		
美唄市	藤巻 裕蔵	7
庭の野鳥のこと	札幌市南区 小堀 煌治	8
釧路市にミヤマガラス	広 報 部	10
平成18年度総会報告		10
探鳥会ほうこく		12
探鳥会あんない		16
鳥 民 だ よ り		16

伊達市にてサンカノゴイ

伊達市 篠原 盛雄

今年4月11日、近年は希にしか見られなくなったサンカノゴイを伊達市にて観察・写真撮影することができました。その日のうちに野鳥愛護会ホームページの「野鳥情報伝言板」に投稿しましたが(#1465)、ここでは写真を添えて、伝言板文章を再掲させていただきます。

今日の夕方長流川河口の観察に出かけましたら、帰る途中車の中から、アシの中になにやら突っ立っている鳥を見つけました。ヨシゴイの類かと双眼鏡で確認したら、何とサンカノゴイでした。伊達では初めて観察する鳥だったので、あわててカメラを構えて撮影の準備をしますと、その鳥が後ろを向いて身体をゆらゆらとゆするではありませんか、変なことをするなと思いつつ、15、6枚ほど車の中から写真を撮っていますと、今度はこちらを向いてじっとして動かなくなりました。あまり脅かしてはと、すぐに車を移動して図鑑で確認しながら、考えてみると一連の変な動きはカモフラージュでした。風が吹いていてアシが揺れていましたから、背中模様を風で揺れているように見せたかったのでしょう。今日は驚きの出会いでした。

[編集部より] 数十年ほど前には勇払原野などでよく見られ、夜には鳴き声がうるさいほどといわれたサンカノゴイも近

年は極めて少なくなり、現在では環境省の絶滅危惧ⅠB種や北海道の絶滅危惧種に指定されています。夜行性のため観察が難しく、写真撮影はさらに困難です。写真付で公表されたものとして、2005年1月23日の苫小牧市弁天でのもの(北海道新聞2006年1月26日夕刊、全道版)と、2005年12月5日の羅臼町でのもの(読売新聞2005年12月8日、および北海道新聞2005年12月9日朝刊、釧路・根室版)がありますが、前者は飛び立つ後姿、後者は横たわった保護個体でした。今回の報告においては、サンカノゴイの観察自体が大切であることはもとより、写真もまた極めて貴重なものとみなされます。



2006年4月11日 伊達市長流川河口付近

保護した鳥達が教えてくれたこと(1)

礼文島 レブンクル自然館 宮本 誠一郎

はじめに

レブンクル自然館で礼文島の自然情報誌「レブンクル自然情報」を発行しはじめたのが1995年3月からです。島民からの自然情報を収集し掲載するうちに、島内で保護された野鳥や、拾われた死骸が我が家に集まるようになりました。今回1996年から2005年までの10年間に持ち込まれた鳥たちの記録を「レブンクル自然情報」の中から拾い出してみると、その数は189羽84種(別リスト1、他コウモリ2種)になりました。鳥の名前はカラス、スズメなどしか分からない素人状態だった私が、いつの間にか野鳥観察の講師をつとめるまでにいたったのは、我が家に届いた鳥たちのおかげとも言えると思います。そんな鳥たちとの出会いには思い出深いものもあり、今回と次号の2回に分けて発表させていただきたいと思います。

1. 青い鳥見つけた

1996年4月22日、保育所から帰った娘が「青い鳥死んでたよ、先生がカワセミだと言ってたよ」と話してくれた。その鳥どうした?と聞くと、そのまま花壇にあるという。翌朝、娘を送りがてら現地に案内してもらおうと、窓際の花壇の脇にカワセミが横たわっていた。私が高校時代を過ごした千葉県我孫子市の手賀沼では冬でもカワセミが見られ、好きな方は毎朝カメラを抱えて撮影に来ていた。こんな北の島でも同じ鳥が見られること、娘が初めて鳥に興味を持ったこと、そしてレブンクルを経由して利尻町立博物館に送られ剥製となった一号目の鳥であることがいつまでも印象に残ります。カワセミはその後、2001年と2004年に保護さ

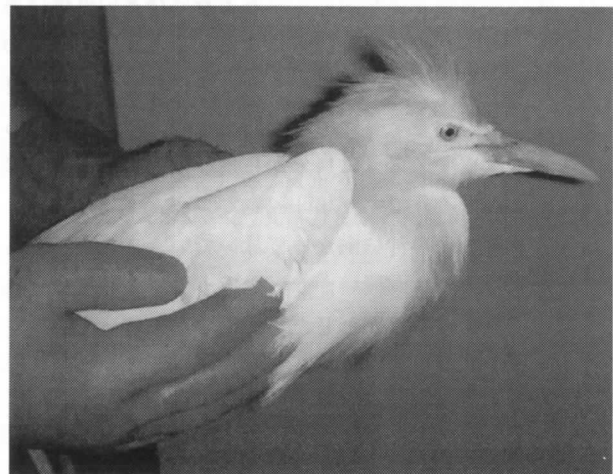


2004年8月8日 香深井川に放鳥したカワセミ

れています。2001年は残念ながら落鳥してしまいましたが、2004年は無事放鳥できました。カワセミの仲間ではアカシヨウビンとヤマシヨウビンが確認され、利尻島ではヤマセミの確認記録があります。カワセミが繁殖している川や湖を持つことで、ヤマセミとの出会いにも期待しています。

2. 小さな鷺ヨシゴイと艶やかなアマサギ

鷺の仲間でも最初に保護したのがヨシゴイでした。雹の降った翌日、久種湖畔の家の庭で腰が立たない容態で保護されました。手のひらに乗る小さな鷺なのに、意外なほど首が長く伸びくちばしで突かれました。芋虫などを食べさせもしましたが、生き餌が手に入らなかったため、蛹粉を与えていました。ところが、そのえさをのどにつまらせた様子で死んでしまいました。その後、ミゾゴイ、コサギ、チュ



2005年5月24日 カラスに攻撃されていたところを保護されたアマサギ

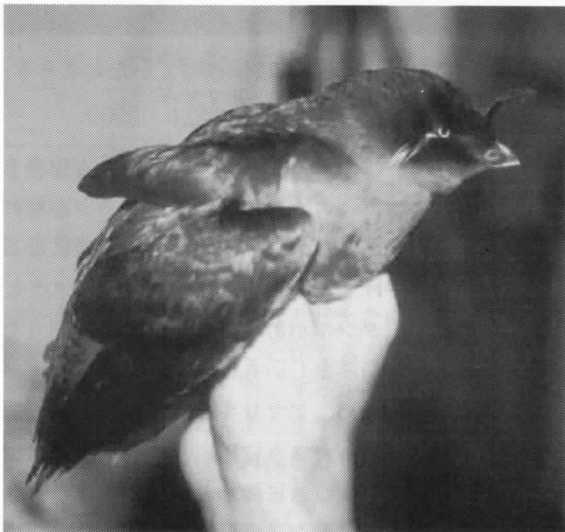
ウサギ、アオサギ、アマサギなど大きな鷺たちも保護されました。アマサギは沖縄の水牛と一緒にイメージが離れないのですが、久種湖の南側も以前は乳牛の放牧地になっていて、牛がいたおかげでアマサギが訪れやすかったのかな?と想像しています。タンポポの咲く牧草地で牛の周りで集まる虫を食べる姿が微笑ましいものでした。今は牧場が廃業して牛の姿がないため、アマサギを含め鳥たちの人間に対する警戒心が強くなったように感じます。そんなアマサギが2005年にハシブトガラスに襲われているところを久種湖のほとりで保護されました。嘴付近にわずかに怪我はありましたが、大きな外傷もなく、しばらく箱の中で休ませると元気になりました。近くで見ると頭毛のオレンジ色は

あでやかで美しいものでした。保護したKさんに暗いうちにカラスの目に付かないように放鳥してもらいました。よく私は礼文島のカラスは狩りをすると人に話すのですが、今までにもコサギやコガモなどを襲う姿を確認しています。

傷病鳥を放鳥する場合は時間帯と場所を選び、カラスの有無を確かめる注意が必要です。なぜならば箱を開けた瞬間に、カラスが傷病鳥に集まってくる場合があるからです。

3. 道路で拾ったウミスズメたち

ウミスズメの仲間が道路で拾えるのも、日本海に浮かぶ島の特徴といえます。今までにウミスズメ、コウミスズメ、エトロフウミスズメ、ケイマフリ、ハシブトウミガラス、ハイロウミツバメ等が、道路や庭で拾われて届けられました。その中でも印象深いのは、私自身で拾った1998年1月24日のエトロフウミスズメです。吹雪の朝、娘を保育所に送る途中、カラスがくわえていた何かをぼとりと落としました。真っ白い雪の上に落ちた小さな黒い鳥が動いています。車を止め、拾いにきたカラスから奪い取ってみると額にちょこんと角のような飾りバネ、目の下に白い毛、かわいらしい目が人生をあきらめたように私を見つめていました。家に持ち帰り体を調べてみると特にひどい外傷はありません。段ボール箱でしばらく休ませると元気そうなので、海に放鳥してみることにして妻と娘に任せました。妻に聞くと吹雪のおさまった海岸の防波堤の上で箱を開けると、エトロフウミスズメは自分から飛び出して、波打ち際の海に浮かんだそうです。方向を確認するようにきょろきょろと周りを見ながら沖に向かって泳いでいきました。するとオオセグロカモメが襲いかかったそうです。2度ほど海にもぐってその攻撃はかわしたそうですが、寄って来た別なカモメ類の若鳥に捕まってしまったそうです。カラスから拾った命を、カモメに与えてしまった残念な出来事でした。



1998年1月24日 顔がオシャレな
エトロフウミスズメ

た。ウミスズメの仲間は吹雪や濃霧の日に方向を誤って島にあがってしまうようです。陸からはうまく浮力が得られないようで、地面でじたばたしています。拾ったら早めに海に放すのが、体力の消耗が少なくてよさそうです。小さな海鳥を放鳥するときはカモメにも注意が必要なることを知りました。

4. 海岸を埋め尽くす鳥の群れ/チカップ

「なんだ!あの海岸の黒い群れは?」2000年5月24日、盗掘防止キャンペーンのバスで移動中に海を眺めていた参加者から声があがった。バスを止め、海岸に近付いてみると、真っ青な海に小さな黒い鳥が無数に集まってうごめいている。鳥に詳しい参加者がアカエリヒレアシシギだと教えてくれた。「そういえば、さっき鳥を拾ったという人から同じ鳥を受け取ったんだ」と別な参加者から箱に入ったアカエリヒレアシシギを見せてもらう。実際には黒と茶のまだら模様の子鳥で、確かに足の指の間には膜状のひれがありました。翌日には10キロほど北上した海岸道路で8羽のアカエリヒレアシシギが拾われた。群れごとトラッ



2005年5月25日 尺忍
アカエリヒレアシシギ2千羽以上

クにでもぶつかった様子で道路脇に落ちていたそうで、地元の漁師さんは「チカップ」と呼んでいました。海岸の群れの様子を観察すると、せわしなく動き回るため、一羽の鳥の動きを追って撮影するのがとても難しいものでした。彼等は脇目も振らず一心に藻の中にある小さなエビなどの甲殻類の仲間を食べてる様子で、3メートル位まで近寄っても逃げようとしません。地元の漁師はチカップが周りを気にしないで餌しか見えていないことを「あぶらめになっている」と表現していました。毎年どこかの海岸で見られる現象だそうで、特に珍しいことではないそうです。実際、私自身も今になってみると気が付いていなかっただけで、毎年、群れはやってきていて、群れの大小、集まっている場所、期間に若干の違いがある程度ようです。2005年には香深の尺忍から新港の海岸に大きな群れが3日間ほど見られました。

リスト1 保護した鳥/拾った死体

(1996年～2005年/189羽/84種+コウモリ2匹)

1996年/6個体/6種

- 04/22 カワセミ死骸/香深井
 04/26 クロジ♀死骸/内路
 08/26 シマセンニュウ?死体/尺忍
 09/29 キクイタダキ♀死体/大備
 10/03 シロハラ♀保護/3日落鳥
 10/25 アオジ♂死体/内路

1997年/14個体/12種

- 05/10 コホオアカ死体/沼ノ沢
 05/12 タヒバリ?3死体/香深井沢
 10/05 カシラダカ死体/香深井
 08/13 ノゴマ幼鳥保護/ゴロタ/20日?落鳥
 09/05 ウグイス若鳥保護/放鳥
 09/ メダイチドリ保護/落鳥/利尻町立博物館
 10/10 コガモ保護/幌泊/12日落鳥
 10/11 ヨシゴイ保護/久種湖湖畔/13日落鳥
 10/11 ヤブサメ?保護/入舟/12日落鳥
 10/29 ウミスズメ保護/津軽町/30日放鳥
 10/30 ミツユビカモメ保護/礼宝園/午後放鳥
 12/06 ハイイロウミツバメ保護/奮部/7日放鳥

1998年/11個体/11種

- 01/24 エトロフウミスズメ保護/香深井
 (午後放鳥後オオセグロカモメに食われる)
 04/05 オオコノハズク保護/尺忍/7日放鳥
 04/12 コハクチョウ保護/幌泊/久種湖に放す
 04/14 伝書鳩保護/大備/12日秋田で放鳥したもの
 09/05 ホリカワコウモリ保護/香深
 09/20 キアシシギ死体/香深井
 09/29 ウグイス死体/入舟
 10/11 ミヤマホオジロ保護/大備?/13日落鳥
 10/17 ツグミ保護/大備/21日放鳥
 10/21 コミズク保護/手然/22日放鳥
 11/07 ヤマシギ保護/尺忍/8日放鳥

1999年/27個体/20種

- 03/15 チョウゲンボウ♀保護/尺忍/16日放鳥
 04/14 トラツグミ保護/香深井/落鳥
 04/15 伝書鳩保護/入舟/即日帯広に発送
 04/15 シロカモメ若鳥死体/船泊湾
 04/19 オオコノハズク死体/幌泊魚干し場
 04/23 伝書鳩保護/香深/即日名寄に発送
 05/09 ツグミ保護/香深/半日後放鳥
 05/16 ミゾゴイ保護/奮部/半日後香深井へ放鳥
 05/28 ツバメ死体/香深井/利尻町立博物館
 05/30 アオジ保護/香深/31日放鳥
 06/01 キジバト保護/香深井/半日後落鳥/利尻町博物館
 06/05 エゾセンニュウ死体/内路小/利尻町立博物館

- 06/16 ムクドリ若鳥保護/香深井/すぐ落鳥/利尻博物館
 06/21 ツミ保護/五番地/翌日落鳥/利尻町立博物館
 07/08 ウトウ死体3/香深井/埋葬
 07/12 アオジ雛保護/香深/27日放鳥
 07/22 ウトウ死体/香深井/1体利尻町立博物館
 08/01 ウトウ死体2/香深井/埋葬
 09/02 スズメ保護/香深/翌日放鳥
 09/03 ベニマシコ死体/香深/利尻町立博物館
 09/12 ハクセキレイ保護/すぐに放鳥
 09/20 ジュウイチ若鳥保護/大備/25日落鳥/利尻博物館
 12/03 ハイイロウミツバメ保護/五番地/5日放鳥
 12/20 オオセグロカモメ保護/尺忍/午後放鳥

2000年/24個体/13種

- 03/25 シメ保護/入舟/すぐ落鳥/利尻町立博物館送付
 03/25 アトリ♂死体/会所前/利尻町立博物館送付
 04/01 アオシギ保護/入舟/2日後落鳥/利尻町立博物館
 04/23 オオワシ漂着死体/香深井/野生生物事務所送付
 05/24 アカエリヒレアシシギ死体1/五番地/利尻博物館
 05/25 アカエリヒレアシシギ死体8/幌泊/利尻町博物館
 08/14 ウグイス♀死体/入舟/利尻町立博物館送付
 09/14 コマドリ♂死体/入舟丸谷/埋葬
 09/26 ウグイス♀死体/内路/利尻町立博物館送付
 10/03 クロジ♂死体/鉄府/利尻町立博物館送付
 10/16 センダイムシクイ?死体/津軽町/利尻町立博物館
 10/22 ウグイス♂保護/内路/午後放鳥
 10/22 オナガガモ♀死体/内路/利尻町立博物館送付
 10/23 ウグイス♂死体/入舟丸谷/利尻町立博物館送付
 10/26 ミヤマホオジロ♂死体/大備/利尻町立博物館送付
 10/30 オオコノハズク保護/尺忍/2日後放鳥
 11/02 トラフズク死体/内路/利尻町立博物館送付

2001年/26個体/22個体

- 02/21 コウミスズメ保護/起登臼/21日落鳥/利尻博物館
 03/24 ヒメウ死体/香深港/埋葬
 04/04 伝書鳩保護/五番地/4日送付
 04/09 ワシカモメ死体/金田岬/埋葬
 04/24 ツグミ保護/会所前/25日放鳥
 04/26 コノハズク保護/大備/27日放鳥
 05/02 キクイタダキ死体/大備/利尻町立博物館送付
 05/04 ベニマシコ死体/高山/利尻町立博物館送付
 05/27 シメ死体/遠別町/利尻町立博物館送付
 05/28 チゴモズ死体/内路/利尻町立博物館送付
 06/06 ツミ?死体/尺忍/利尻町立博物館送付
 06/08 キジバト保護/入舟/落鳥/埋葬
 06/10 キセキレイ死体/知床/利尻町立博物館送付
 06/10 オオセグロカモメ保護/大備/10日放鳥
 08/05 カワセミ保護/香深井/落鳥/利尻町立博物館送付
 09/04 オオセグロカモメ保護/会所前/6日放鳥
 09/17 トラツグミ死体/内路/埋葬
 10/01 アオジ保護/入舟/1日放鳥
 10/05 メボソムシクイ保護/尺忍/落鳥/利尻町立博物館

- 10/13 ウソ保護/入舟/13日放鳥
- 10/18 ヤマシギ保護/尺忍/19日放鳥
- 11/01 ウソ♂死体/内路/埋葬
- 11/02 ウグイス♀死体/高山/埋葬
- 11/03 メボソムシクイ保護/会所前/3日放鳥
- 11/28 オオセグロカモメ保護/船泊保育所/28日放鳥
- 12/25 オジロワシ保護/上泊/25日宗谷支庁送付

2002年/14個体/14種

- 04/15 イワツバメ保護/手然/放鳥
- 04/30 チュウサギ保護/久種湖/落鳥
- 05/04 キビタキ死体/須古頓
- 05/08 ウソ♀2死体/入舟/埋葬
- 05/09 アトリ死体/礼文滝/埋葬
- 05/28 トラフズク死体/宇遠内/埋葬
- 08/25 マミジロ保護/知床/26日放鳥
- 09/09 エゾビタキ保護/商工会/落鳥
- 09/23 ヒナコウモリ保護/香深駅/利尻町立博物館
- 09/25 オオワシ死体/ベンサシ/情報のみ
- 10/07 マミチャジナイ死体/大備
- 10/09 メボソムシクイ保護/大備/放鳥
- 11/22 シメ死体/入舟
- 11/23 ミソサザイ死体/香深井

2003年/19個体/19種

- 01/19 オオワシ保護/元地/20日放鳥
- 01/30 キクイタダキ保護/尺忍/30日落鳥
- 03/27 伝書鳩保護/香深井米沢宅前/持主に送る
- 04/17 シロカモメ保護/幌泊須藤/18日元地に放す
- 04/24 オオセグロカモメ足輪付き落鳥/上泊/足輪を山階に送る/環境庁JAPAN 02**3/110(一部読めなくて正確ではない。10年前に道内で付けた。)
- 05/21 マヒワ死体/知床
- 05/25 アカエリヒレアシシギ保護/大備/26日落鳥
- 06/12 ツミ♂保護/香深/13日放鳥
- 07/19 ウソ♂保護/入舟/20日落鳥
- 08/24 ハイタカ♀保護/知床/折れた羽を切除/29日没
- 09/02 シマセンニュー?死体/手然
- 09/08 キジバト保護/浜中/11日放鳥
- 09/10 ウミネコ死体/高山/(天売島赤ウイング黒89番/9A67566/)
- 09/14 ハイイロウミツバメ保護/香深井/15日落鳥
- 10/02 キクイタダキ♂保護/大備/3日放鳥
- 10/04 ウグイス死体/大備
- 10/16 シロハラ死体/内路小
- 11/03 ミヤマホオジロ死体/内路
- 11/11 コミズク保護/知床/12日落鳥

2004年/26個体/19種

- 01/28 ケイマフリ保護/香深井/29日放鳥香深漁港

- 02/25 キクイタダキ♂死体/香深井
- 03/31 ミヤマホオジロ♀死体/内路
- 04/02 アトリ♂死体/高山植物園
- 04/06 ハシブトウミガラス死体/知床
- 04/07 ヒガラ死体/尺忍
- 04/21 キビタキ♂保護/礼文小学校/落鳥
- 04/22 オオルリ♂死体/大備
- 04/23 キビタキ♂死体/大備
- 04/24 オオルリ♂死体/大備
- 04/26 ミヤマホオジロ♀死体/内路
- 04/28 オオルリ♂死体/津軽町松田
- 05/02 ミヤマホオジロ♀死体/内路
- 05/08 トビ保護/香深井共栄水産/久種湖放鳥
- 05/09 シジュウカラ死体/内路
- 05/14 トビ保護/久種湖/午後放鳥
- 05/16 伝書鳩保護/翌朝発送
- 05/24 トビ保護/内路/落鳥/25日水喪
- 05/25 シメ保護/尺忍/午後落鳥
- 08/07 オオセグロカモメ保護/浜中/8日元地に放す
- 08/07 カワセミ♀保護/香深/翌日香深井放鳥
- 08/22 マミジロ♀保護/内路小/落鳥
- 09/05 スズメ死体/香深駅
- 10/12 シロハラ死体/大備/窓に衝突
- 10/16 ヤマシギ死体/入舟
- 10/26 ミソサザイ保護/尺忍放鳥

2005年/22個体/19種

- 01/16 ハシブトウミガラス保護/内路/放鳥
- 01/17 ハシブトウミガラス死体/差閉/利尻町立博物館送付
- 04/09 ミヤマホオジロ♂死体/内路
- 04/18 シロハラ死体/鮑古丹
- 04/19 ツバメ死体/入舟
- 05/09 コサギ保護/入舟/落鳥
- 05/11 ルリビタキ保護/入舟/落鳥
- 05/20 アマサギ保護/大備/21日放鳥
- 06/01 ツミ♀保護/入舟/2日放鳥
- 06/08 オオセグロカモメ保護/放鳥
- 08/10 アオジ若保護/入舟/放鳥
- 08/19 ウミウ若保護/内路/19日落鳥
- 09/11 ゴジュウカラ保護/入舟/放鳥
- 09/14 シメ保護/入舟/放鳥
- 09/24 アオサギ保護/入舟/25日落鳥
- 09/28 ウグイス保護/入舟/29日放鳥
- 09/29 コガモ保護/礼宝園/落鳥
- 10/19 キバシリ保護/香深駅/落鳥
- 10/21 ツグミ保護/入舟/22日放鳥
- 10/24 ウソ雄雌保護/内路小/落鳥
- 10/31 ウソ♂死体/内路小
- 10/31 ウソこの週に毎日ぶつかる/礼宝園

北海道におけるヒバリの繁殖期の分布

美 唄 市 藤 巻 裕 蔵

ヒバリは北海道では夏鳥で、3月下旬～4月上旬頃に渡来し、10月下旬～11月上旬までには渡去する。ここでは繁殖期における分布について述べる。

調査方法、使用したデータ、まとめ方については、カケスの分布(本誌121号)とコムクドリの分布(本誌130号)で述べたのと同じなので、省略する。ただ、2005年までに調査した区画(ほぼ5km四方)数は692、調査路数は775に増えている。分布図については全てのデータを用いたが、生息環境別と標高別の出現率については692区画の775調査路で得られた結果だけを用いた。

分 布

図1に、10km四方の区画を単位として繁殖期のヒバリの分布を示した。

北海道北部と渡島半島では記録が少なく空白部が多いが、ヒバリは勇払平野、石狩平野、十勝平野、根釧地方、上川盆地などに分布していて、夕張山地、日高山脈、大雪山系などの標高の高い山間部にはほとんど分布せず、観察されない区画が多かった。

生息環境

生息環境については、環境を森林(ハイマツ林を含む)、草地、草地・林(観察路沿いの環境の20%以上が1～2列からなる防風林以外の林)、農耕地、農耕地・林、住宅地の6つに区分した。環境別、標高別に出現率(全調査路数に対するヒバリが出現した調査路の割合)を表1に示した。

生息環境別に出現状況を見ると、森林では標高200m以下で2%あっただけで、標高201m以上では0%であった。森林でヒバリが観察されたのは2か所だけで、その環境は

表1. ヒバリの生息環境別・標高別の出現率(%)

生息環境	調査路数	標 高 (m)				全体
		～200	201～400	401～600	601～	
森 林	336	2	0	0	0	1
草 地	29	86	—	—	—	86
草地・林	25	80	—	—	—	80
農耕地	191	95	100	100	—	97
農耕地・林	167	71	81	100	100	70
住宅地	27	29	0	0	—	26



図1. 北海道における繁殖期のヒバリの分布

一つの区画は約10km四方で、1/25,000地形図に相当する。

●=生息が確認された ○=調査したが観察されなかった ・=未調査

いずれも一部(調査路の10~15%)が離農跡の連続した草地であった。それ以外の環境での出現率は、農耕地で98%と最も高く、次いで草地の86%、草地・林の80%、農耕地・林の70%、住宅地の26%であった(表1)。森林以外の環境の大部分は低い平野部にあるので、ヒバリの分布は平野部の広がりにはほぼ一致していた。住宅地でヒバリが出現したのは、調査路沿いに農耕地がある場合であった。「全国主要都市の都市鳥」(都市鳥研究会 1991)によると、北海道の5都市のうち、網走、札幌、帯広、函館ではヒバリは市街地で繁殖する鳥類に挙げられていないが、釧路と根室では市街地で繁殖する種のリストに含まれており、その生息環境として公園や運動公園の草地が挙げられている。住宅地でも公園の草地や農耕地があると、ヒバリは生息できるようである。

以上のように、ヒバリは生息環境によって出現率がはっ

きりと異なり、「草原性」という特徴を強く示している。本誌136号で紹介したように、ヒヨドリは森林性鳥類であるが、農耕地や住宅地にもかなり生息していて、生息環境の幅が広いが、これに比べるとヒバリの生息環境の幅は非常に狭いと言えるだろう。

出現率が生息環境間ではっきり異なっているので、標高別の出現率については環境別に見ることにする。標高201m以上でも出現率が高かった農耕地と農耕地・林について200m以下と201m以上とで比べると、出現率に差はなく、農耕地のように開けた環境があれば、かなり高い標高まで生息できるようである。しかし、ヒバリは大雪山系や日高山脈の森林限界より上の開けた環境には生息しない。

文 献

1991「全国主要都市の都市鳥1990」都市鳥研究会、和光市

庭の野鳥のこと

札幌市南区 小堀 煌 治

窓の外から練習不足の「ホーケキョ」、耳を澄ますと低い声でキジバトも鳴いている。サクラの芽も膨らんできて厳しかった冬も終わろうとしている。もう餌台を片付ける季節になった。この冬はタンチョウの生息数が千羽を超えたという、めでたい話もあったが、その後は油汚染による海鳥の大量死、3月に入ってからはスズメの大量死や数の減少、ここ数年続いている鳥インフルエンザの広がり、マスコミでは野鳥の話題が多く報じられた。3月になってからは、わが家の餌台の常連スズメがずい分減った。そんなこともあり、我が家の庭に来る野鳥の事を書いてみた。

藤野に住んで30年、毎年庭に給餌台を用意して野鳥に餌を与えてきたが、最近、給餌に疑問を呈する声が強くなってきた。給餌をしている知人からも戸惑いの声が聞こえてくる。いわく、「人が下手に手を貸すと野鳥本来の生態系が狂ってしまう」、「スズメやカラスがたくさん集まってフンや騒音で近所から苦情が来る」。いわく「小鳥を狙ってタカが来て庭で羽をむしって食べているのは残酷だ」。最近では「鳥インフルエンザのウィルスを撒き散らすのではないか」などなど、もっともな意見ではあるが疑問もある。本当に給餌は良くないことなのだろうか、考えてしまった。

もともと給餌の始まりは人間が自然を破壊(オーバーユース)したうえ、人間が一番良い環境を独占している。せめて餌が少ない冬の間は給餌をして野鳥を助けてやろう。そんなところから家庭の給餌台が始まったのではないだろうか。もちろん近くでかわいい鳥たちを眺めてみたいという

下心もあるのだが。

その一方、純粋な野鳥救助活動として給餌を行い野鳥を救った例もある。一時は絶滅したと思われたタンチョウが冬の給餌で助けられ、その後の給餌活動が功を奏して昨年はついに安全圏まで数が回復した。これは世界でも稀な例だという。ハクチョウも穀物やパンを与える余裕が無かった時代に篤志家が全国からお茶ガラなどの餌を集めて助けたという、そんな子供の頃の記憶もある。

鳥インフルエンザに関しては鳥たちが「濡れ衣」を着せられているのか、真犯人なのか、分からない。現在は「鳥から人へ」の段階だが、「人から人へ」の感染が始まれば「ヒトは家畜化された動物」と言われているように同じような環境で同じような生活しているので、あっという間に感染は拡大するという。そうなれば野鳥とも距離を置かなければならないだろう。30年前はマガモに近づくとが大変だった。写真撮影にも苦労した。今では陸に上がってきて人の手から餌をもらうまで近づいて来たが、こんな鳥との楽しい関係も見直さなければならなくなるのかもしれない。最近では各国が鳥インフルエンザの実態解明に真剣に取り組みだした。カラスに感染が確認されている日本でもヒトに感染する前にタテ割り行政の枠を越えて、解明と対策に取り組んで欲しいと思う。

さて、わが家では紅葉の頃になるとカラ類やゴジュウカラ、アカゲラが庭に偵察に来る。ペットボトルをくちばしでたたいて催促しているが、まだまだ給餌台は出さない。雪が積もってから雪を盛り上げ支持棒を立てその上に餌台

を置く。従って雪が消えれば餌台は自然消滅する。毎日の餌も過剰サービスせずに午前中ぐらいで無くなるような量にしている。カラスは人間の目が無い早朝に来るので、それまで餌を残さないようにしている。餌台を置くと窓への衝突事故が起きるので、バードセーバー(タカの絵)を窓に貼って衝突を避けている。一応こんな配慮をしながら、鳥達を少しは助け自分達も楽しませてもらっている。この程度なら今の所問題は無いと思っているのだが、どうだろうか。これまでに庭に集まった野鳥のことをまとめてみた。

観察したこと気が付いたこと

今年(平成18年)は異様な年だった。初冬からカラ類やゴジュウカラは姿を見せていたが頻度が極端に少なかった。サクラの芽が膨らんでくる頃、毎年ウソが来ていたが今年は鳴き声も聞かない。その分、桜の芽は健在でソメイヨシノは見事に咲いた。一方では庭の松の根元に何度もマヒワが来てくれる嬉しい年でもあった

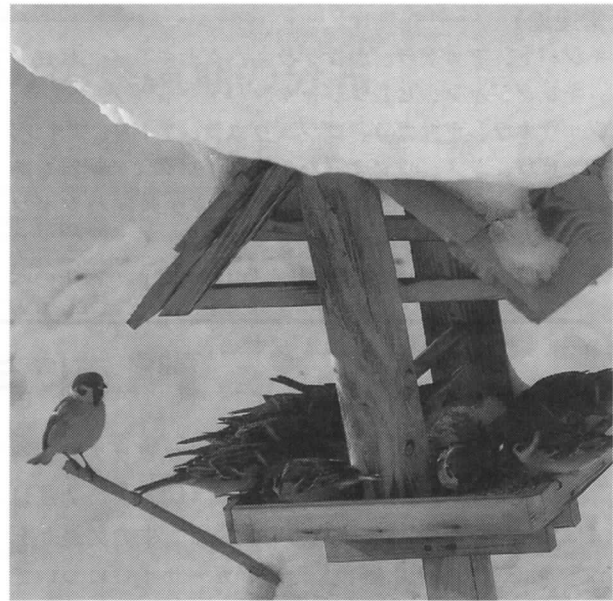


シジュウカラを捕らえたカケス

3月に「スズメが消えた」という新聞記事を読んだ時、まさかと思ったが、思い起こしてみると思い当たるふしがあった。この冬は1羽だけ餌台に残る動作の鈍いスズメを何度か見た。3月中旬になると集まる数が1/3に減った。狭い餌台で押し合いへし合いしていたのが、ゆったりと餌を食べている。研究機関の原因解明に時間がかかりそうだが不気味な感じがした。

ヒマワリの実の食べ方を観察するのも面白い。カラ類やゴジュウカラは指で抑えてつついて殻を割り実を食べる。アトリやシメなどアトリ科は上下のくちばしで殻を割り実を食べる。スズメはどちらの技も持たないので、これまでヒマワリには手を出さなかったが、数年前から容器のヒマワリを次々に下に落とすようになり、たちまち空にしてしまう。シメの食べ方を見て学習したのだろうか、落ちたのを、くちばしに挟んで割ろうとして何度も繰り返しているが、まだ成功していないようだが、その内マスターしスズメも一歩進化するのだろうか。

一度だけだがカケスがシジュウカラを捕えたのを見た。



餌台に群がるスズメ

執拗にシジュウカラを追いまわしているの、いたずらかと思っていたが、遂に捕えて首をくわえて飛び去った。あのカケスが特異な個体なのか、山ではいつものことなのか分からない。

集まった野鳥と動物

わが家の周辺は地価が安く、バブルの影響も少なく自然が割合残っている。近くに公園があるせい、わが家の庭には餌を食べに来る鳥の他に、無意根山や空沼岳に渡る途中に立ち寄っていくものもある。これまでに観察したのには次のような鳥で意外な鳥が姿を見せることもある。

嬉しかったのはクロジが寄ってくれたことだ。5月の連休の頃、カメラを担いで山を歩き回り、たいした成果もないまま、家に帰ると家内が「今日一日クロジが庭に来ていたよ」というのではないかと。山を歩きまわっても、まともな写真を撮ったことがないクロジが庭に来るはずがない。普段あまり鳥に関心の無い人間が言うことなので聞き流していたが、「図鑑をみたらクロジだった」と、そこまで言うので、半信半疑ながら窓を開けてカメラをセットした。まもなくフワリとクロジが降りて来たではないか、そしてヒマワリの実を食べだした。写真もなんとか撮れたし、めでたしめでたしの来訪だった。

オオルリ、ノゴマは渡りの途中に立ち寄るだけ、餌を求めて来るわけではない。ベニマシコ(メスが一度)、ハギマシコが一度来てヒマワリを食べていた。ウソは桜の芽を食べに来るし、昨年はヒマワリを食べていた。ミソサザイは冬に姿を見せることがある。冬囲いを出たり入ったりしている。最近姿を見せなくなったものは、コウライキジ、オオアカゲラ。動物はエゾリスがヒマワリ、今年にはホンダイタチがパンを食べに来て雪に潜ったり出たり。キツネは見えなくなった。

(常連達)

キジバト、アカゲラ、ヤマゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、キレンジャク、ヒレンジャク、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アトリ、アオジ、カワラヒワ、シメ、ツグミ(ハチジョウツグミの記録もある)、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス。

*ハシブトガラ、コガラは自信が無いので写真で本州のベ

テランに同定をお願いしたらコガラも来ていた。レンジャクは年によるバラツキはあるが、今年はキレンジャクもヒレンジャクも来た。

わが家の餌台はこんなことですが、給餌の是非については皆さんの意見も寄せてもらい皆で考えてみませんか。

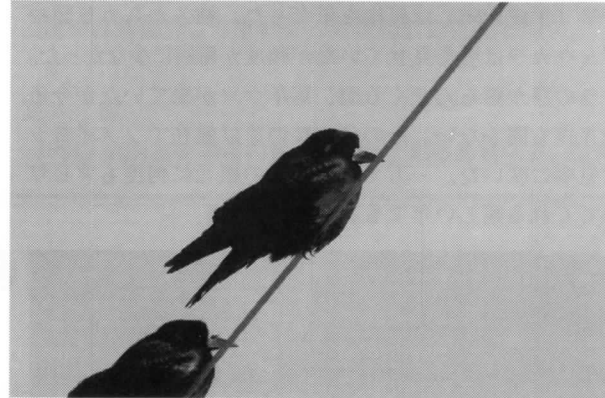
追記：市民講座「今冬の異常気象と小鳥たちの生態」でエコネットワークの小川氏は、スズメの死は餌不足の可能性もと発言しておられました。

釧路市にミヤマガラス

広 報 部

釧路市在住の芹澤裕二さんからミヤマガラスの観察記録と写真が寄せられました。今年(2006年)2月11日に釧路市音羽のJ A阿寒音羽農場で、牛の飼料として、牧草を粉碎し、野積したバンガーサイロについている15羽(成鳥11、幼鳥4)の群れが確認されたとのこと。写真は群れがその近くの電線にとまったところを撮影したものです。

ミヤマガラスは近年になって北海道の冬鳥としてすっかり定着しましたが、道東ではほとんど記録はなく、釧路市での記録は公表されたものとしてはおそらく初めてになります。



ミヤマガラス 2006. 2. 11 釧路市音羽

平成18年度 総 会 報 告

日 時：平成18年4月7日(金) 午後6時30分～7時30分

場 所：札幌市民会館 第3会議室

小堀煌治会長の挨拶のあと、議長に戸津高保氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決、承認された。

〈議 事〉

1. 平成17年度事業報告

[総 務]

- (1) 野鳥写真展の開催
開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー
開催期間：平成17年4月26日(火)～5月16日(月)
出 典：7名、13点
- (2) 「野鳥だより」の発送(140号～143号)
- (3) 新年野鳥講演会、野鳥写真映写会の開催
講 師：林 吉彦氏「白神岬を渡る鳥たち」
平成18年1月14日(土)
札幌市男女共同参画センター
参 加 者：74名(野鳥写真提供者7名)
- (4) 愛護会名入りカレンダーの作成・販売(70部)
- (5) フクロウバッジの作成・販売(490個)
- (6) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)
- (7) 傷害保険の更新

[広 報]

- (1) 「野鳥だより」140号～143号の発行

- (2) 愛護会ホームページの維持・運営

[探 鳥]

- (1) 探鳥会27回(1回平均34名)

[会 計]

- (1) 平成17年度決算報告
- (2) 平成17年度会計監査報告。大野信明・村野紀雄監事から適正に処理されている旨の報告があった。

2. 平成18年度事業計画

[総 務]

- (1) 野鳥写真展の開催
開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー
開催期間：平成18年4月25日(火)～5月14日(日)
- (2) 「野鳥だより」の発送(144号～147号)
- (3) 新年講演会、野鳥写真映写会の開催
平成19年1月予定
- (4) 愛護会名入りカレンダーの作成・販売(70部)
- (5) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)
- (6) 傷害保険の更新

[広 報]

- (1) 「野鳥だより」144号～147号の発行
- (2) 愛護会ホームページの維持・運営

[探 鳥]

- (1) 探鳥会27回(宿泊探鳥会を含む)

[役員人事]

岡田幹夫氏のご逝去のため空席となっていた探鳥幹事代表に中正憲信氏が就任し、それに伴って岩崎孝博氏が総務幹事代表になった。また、品川睦生氏と横山加奈子氏が新しく総務幹事となった。その他、若干の担当変更があった。

(探鳥) ◎中正 憲信、梅木 賢俊、栗林 宏三
 後藤 義民、佐藤 幸典、佐藤ひろみ
 竹内 強、田子 元樹、富川 徹
 成澤 里美、早坂 泰夫、松原 寛直
 山口 和夫、渡辺 俊夫

(広報) ◎樋口 孝城、岩崎 孝博、北山 政人
 白澤 昌彦、島田 芳郎、高橋 良直
 武沢 和義、道場 優、戸津 高保
 道川富美子、山下 茂

(◎印は各担当の代表者)

[平成18年度役員]

顧問 谷口 一芳、藤巻 裕蔵、井上 公雄

会長 小堀 煌治

副会長 戸津 高保

監事 大野 信明、村野 紀雄

会計幹事 蒲澤鉄太郎、清水 朋子

代表幹事 白澤 昌彦

幹事

(総務) ◎岩崎 孝博、大町 欽子、蒲澤鉄太郎
 栗林 宏三、佐藤ひろみ、品川 睦生
 中正 憲信、松原 寛直、横山加奈子

会員数

	13.4.1	14.4.1	15.4.1	16.4.1	17.4.1	18.4.1
個人	324	339	346	341	349	321
家族	42	46	42	38	40	34
団体	2	2	2	2	2	2
	(408)	(431)	(430)	(417)	(429)	(389)

注：()は個人会員数+(家族会員数×2)

平成17年度 決算書

(収入の部)

項目	予算	決算	増減	備考
繰越金	310,844	310,844	0	
個人会費	660,000	757,000	97,000	前納分を含む
家族会費	120,000	101,000	▲ 19,000	
団体会費	10,000	15,000	5,000	前年度分を含む
参加費	30,000	37,000	7,000	新年講演会参加費
売上金	130,000	197,260	67,260	カレンダー、バッジ他
雑収入	4,156	25,391	21,235	宿泊探鳥会剰余金ほか
合計	1,265,000	1,443,495	178,495	

(支出の部)

項目	予算	決算	増減	備考
印刷費	600,000	559,085	▲ 40,915	野鳥だより印刷費
通信費	180,000	146,910	▲ 33,090	野鳥だより郵送費ほか
会議費	40,000	37,440	▲ 2,560	幹事会、新年講演会
消耗品費	90,000	40,009	▲ 49,991	野鳥だより発送用封筒ほか
交通費	18,000	20,000	2,000	野鳥だより発送業務
報償費	92,000	89,000	▲ 3,000	事務所費用、講師謝礼
雑費	60,000	50,560	▲ 9,440	写真展、傷害保険など
予備費	185,000	30,000	▲ 155,000	弔慰費
合計	1,265,000	973,004	▲ 291,996	

1,443,495 (収入) - 973,004 (支出) = 470,491 (次年度へ繰越)

平成18年度 予算書

(収入の部)

項目	本年度予算	前年度予算	増減	備考
繰越金	470,491	310,844	159,647	
個人会費	660,000	660,000	0	330名×2,000
家族会費	90,000	120,000	▲ 30,000	30家族×3,000
団体会費	10,000	10,000	0	2団体×5,000
参加費	30,000	30,000	0	新年講演会 60名×500
売上金	139,000	130,000	9,000	カレンダー、バッジ他
雑収入	509	4,156	▲ 3,647	
合計	1,400,000	1,265,000	135,000	

(支出の部)

項目	本年度予算	前年度予算	増減	備考
印刷費	600,000	600,000	0	野鳥だより印刷費
通信費	150,000	180,000	▲ 30,000	野鳥だより郵送費ほか
会議費	40,000	40,000	0	幹事会、新年講演会
消耗品費	40,000	90,000	▲ 50,000	宛名シールほか
交通費	20,000	18,000	2,000	野鳥だより発送業務
報償費	92,000	92,000	0	事務所費用、講師謝礼
雑費	60,000	60,000	0	写真展、傷害保険など
予備費	398,000	185,000	213,000	
合計	1,400,000	1,265,000	135,000	



円山公園探鳥会に 参加して

2006. 3. 2

札幌市中央区
佐野 純子

札幌の6時の気温+4℃、風も無く穏やかで春を思わせるような気持の良い朝、円山公園の野鳥観察会に参加しました。

まず鳥居近くの給餌場で観察。シジュウカラ、ゴジュウカラ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラとお馴染みのカラ類がせわしなく飛び交っています。すると「シメがいます」の声。教えてもらって、よく見ると奥の木の枝にとまっているのが見えました。よくあんな所でジーンとしているのを見つけたこと！一人では探せなくても、大勢の目で見ると見つける事ができるのですね。やっぱり私のような初心者には観察会に参加するのが一番です。

境内・梅林を周って登山口の横から円山の山裾を歩きました。「ウソがいます」と声が出たので、大きな桂の木を見上げると数羽のウソが実をついばんでいます。すると「ミソサザイがいます」との声ですぐそちらを探してみますが、もう木の裏に回ったのか姿は見えません。まごまごしていると「アカウソがいます」の声に双眼鏡で探してみますが、分かりません。スコープを覗かせてもらって、なんとなく喉からお腹のほうまで赤味が広がっているアカウソを見ることができました。でも結局私はミソサザイを見ることはできませんでした。一緒に出てこないでよ……。

この日は他にカワラヒワ、ハギマシコ、私は見つけられませんが、キクイタダキ、ヤマゲラ等が観察されました。

円山公園で鳥を観察し始めたのは4～5年前になります。その頃でももうすでに数種の鳥が、案内板には絵があるのに観察されなくなっていました。それでも今よりずーっと種類も個体数も多く見ることができたように思います。一昨年の台風で円山の木も随分倒され、植生が変わったように思います。餌となる木の芽や実、昆虫、巣となる木が少なくなったのではと素人ながら心配してしまいます。それに天然記念物として保全されているといっても、ぎりぎりまで大きな建物が次々と建ち、円山は陸の孤島のように思います。年々環境が悪化しています。先人たちの英知と先見の明により大都会のすぐそばに残された緑は札幌市民の宝。鳥や草花の愛らしい姿がいつまでも絶える事のないよう願わずにはられません。

【記録された鳥】トビ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、カワラヒワ、ハギマシコ、ウソ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 17種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、阿部礼子、板田孝弘、今泉秀吉、今村三枝子、氏家正毅、大町欽子、蒲澤鉄太郎、北山政人、佐々木泰夫、笹森繁明、品川睦生、島田芳郎・陽子、鈴木マミ、新城 久、高田征男、高橋良直、武沢和義・佐知子、田中 洋・雅子、田辺 至、戸津高保・以知

子、中正憲信・弘子、樋口孝城、平野規子、広木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、村上茂夫、安 真一郎、山口和夫、山田甚一、山田良造、横山加奈子、渡邊 偕、松木 以上 42名

【担当幹事】武沢和義、島田芳郎

ウトナイ湖

2006. 3. 26 札幌市東区 栗林 宏三

ウトナイ湖に着くと湖は白波が立ちすごい風。札幌を発つ時は雨ばかり心配していたが……。9時30分、鳥獣保護センターの入口で担当幹事の挨拶の後、湖での探鳥となったが、強い風に心配していた雨が降り出して来たので、後はひたすらネイチャーセンターを目指す。ネイチャーセンターで30分程探鳥をして鳥合わせとなった。皆様お疲れ様でした。これに懲りず、又参加お願いします。

【記録された鳥】ダイサギ、アオサギ、トビ、オジロワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、ヨシガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、ウミネコ、カモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、アカゲラ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、スズメ、ハシボソガラス 以上 31種

【参加者】板田孝弘、岩崎孝博、大表順子、大島 武、荻野裕子、片山 實・慶子、蒲澤鉄太郎、栗林宏三、小堀煌治、品川睦生、島田芳郎・陽子、高田征男、高橋良直、田中哲郎、道場 優・信子、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、橋爪陽子、畑 正輔、樋口孝城、松原寛直・敏子、山口和夫、山田良造、横山加奈子、吉田慶子、鷺田善幸、渡邊 偕、飯盛 以上 34名

【担当幹事】栗林宏三、道場 優

野幌森林公園探鳥会に参加して

2006. 4. 9 札幌市西区 村上 茂夫

出発に先立つミーティングで主催者側から約6kmを歩く予定と告げられた。遊歩道はまだ20cmほどの雪に覆われていたが、参加者は心得たもの、雪道対策は万全に見えた。僅かに黒土の出ている場所でフクジュソウやザゼンソウを見つけ、一行は歓声を上げた。が、無風曇天で見通しもよいのに、ドラミングや野鳥たちのさえずりが聞こえただけで、退屈する人も出るほど、野鳥たちの姿は見かけなかった。ところが終了間際になって南斜面の雪融けが進んだ場所でカケスやヤマゲラやシジュウカラなどが出現して、私たち先行グループは俄然色めきたった。どれも活発に動き回っており、心を浮き立たせてくれたが、特に一羽のカケスは左右に何度も移動してこちらの注意を引こうとしているかのようなだった。初列雨覆の三色の美しい姿を暫く観察し続けた。そのうちに、急に懐かしさがこみ上げてきた。数十年前の少年時代を思い出したのである……。

ここは西紋別地区。オホーツク海に近い丘陵地には畑作農家が点在していた。我が家も村はずれにあり、親子6人

が暮らしていた。森と畑に囲まれ、冬は雪が多くて寒く夏は一月も夏日が続くこともあった。農作業に役立つため私たち4人兄弟に手をやいていた親は「餓鬼ども」と呼ぶことがあった。餓鬼どもは、親が経済的に恵まれていなかったけれど、近所の同年代の仲間と一緒にいろいろな「遊び」を工夫して結構充実した生活を送っていた。野鳥たちとの触れ合いもそんな「遊び」の一つであった。

晩秋になるとカケスがトドマツやカラマツの植林してあるわが家の周りによく飛来した。軒下にぶら下がっていた乾燥トウモロコシを狙っているのだ。餓鬼どもは一計を案じて「はねつるべ」と呼んでいた仕掛けこしらえてトウモロコシを餌にしてカケスを二羽捕らえることに成功した。姿や羽の美しさにも魅せられたのであろうか、木箱を改良し金網を張った箱に入れて飼育を試みた。何日か経ったある日の朝のことである。箱の覆いを取って慌てた。止まり木には一羽しか見えず、もう一羽は下に横たわっており、周りには毛が散乱していた。血の滲んだむき出しの皮膚が痛々しかった。(野鳥図鑑には書いていないが)「共食い」であった。事態の急変に驚いて親に報告すると一喝され、餓鬼どもはあわてて箱を壊して元気な一羽を解放してやり、骸になった一羽は、以前に無鑑札だということで毒まんじゅうを食わされて死んだ飼い犬と同じように、畑の片隅に丁重に葬った。

初冬の降雪の多い日など、ハヤブサに襲われるスズメたちを何度も見た。ある時十羽ぐらいのスズメの群れが我が家の近くに生えているグスベリの木にとまってやかましく鳴きだしていた。そこへトドマツのある方角からハヤブサが襲来してあつという間に一羽を搔っ攫って去った。この猛禽類の早業に餓鬼どもはあつけにとられた。暫くしてグスベリの木の下に動くものを見つけ、雪をこいで近寄ってみると、何とハヤブサの来襲で腰が抜けて(?)飛べなくなったスズメたちであった。餓鬼どもは栗の実を拾うように興奮してパニックに陥った数羽を捕まえた。掌の中の小さな命たちは鋭い爪をたてて予想外に力強くもがいた。繁殖期にはスズメたちは毎年母屋や家畜小屋や納屋に巣作りして、親鳥が餌を運んでくるとあちこちの巣から雛の鳴き声がしてにぎやかだった。巣が混み合っていたのか、雛が巣から落ちる事故もあった。その時タイミングよく通りかかった飼い猫(我が家には常時数匹いた)がすばやく雛を銜えて走り去るのを見て、猫が身欠きニシンやマタタビだけでなく野鳥も好物であることを餓鬼たちは学習した。

ある年の初夏の頃、餓鬼どもの関心はカラスに移っていた。カラスはトウモロコシ畑や大豆畑を荒らしていた。若芽を根こそぎ巣に持ち帰っていたらしい。連日汗まみれで農作業をしていた餓鬼どもの親は嘆いた。餓鬼たちは畑に隣接した大木の中にこの憎いカラスの巣を発見し襲った。木登りの上手な者が(親ガラスより一回り小さいだけの)雛を、親鳥の猛烈な反撃にあいながらも巣ごと地面に落とし捕獲した。間もなく雛たち死骸は棒にくくりつけられ、畑の中に吊るされたのだった。農作物を守るのにどれだけの効果があったかは分からなかったが…。

野幌森林公園のカケス君(嬢かも)は、往時の思い出と共に胸中に長く封印されていた罪悪感のようなものをも呼

び覚ましてしまった。『徒然草』の作者の表現を借りれば、「あやしゆこそものぐるほしけれ」に近い心境ということになるだろうか。

私にとって身近に感じられるこれらの野鳥たちも、探鳥会や自然観察会ではあまり評判がよくないようだ。カケスは他の鳥獣の鳴き声をまねて人を騙すとされている。スズメやカラスは『枕草子』の時代から「常にある鳥」とされており、特にスズメは貴族たちの家庭で子どものペットとされていたらしい。現代でも評価はあまり変わっていないようだ。ヒヨドリも鳴き声がうるさいなどと言われる。しかし、研究者によれば、生ゴミ漁りの目立つカラスも害虫を相当数捕食しており、益鳥の側面も強いと言う。スズメやヒヨドリも子育て時期には虫を多く捕食しているから、同様の役割も果たしていると考えてよさそうだ。

私が豊かな(?)少年時代を過ごした森や林は、一部を除いて、今は殆ど牧草地や放牧地が変わっている。酪農家の生活基盤の整備と引き換えに多様な動植物の宝庫が失われてしまった。一方、この野幌森林公園は多様な動植物に恵まれた貴重な自然として全国的にも知られ、多くの人たちの憩いの場となっている。人々の多様で持続的な保護活動の賜物であろう。でも近年、外来動物の個体増加や固有種の減少などで生態系にも変化が見られるという。一昨年秋の台風被害(大量の風倒木)の影響も徐々に現れるはず。安閑としてはいられないだろう。

かつて豊かな森林だった中国の黄土高原は現在では土壤浸食が恒常化して黄砂の供給地となってしまった。樹木がなくなると人も鳥獣も生きることが難しくなる。言い古されたことではあるが、人為にかかわる自然破壊にはそれほど時間はかからないけれど維持・復元には長い時間と努力が必要である。野鳥たちが舞い囀る森林は私たちの貴重な憩いの場である。それを長く保つためには、生物多様性を保障する強力な対策を行政に求めると同時に、私たち自身も身近な所で等身大の努力を続けることが肝要であろう。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、ハイタカ、オオタカ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、シメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 23種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、今村三枝子、氏家正毅、蒲澤鉄太郎、川原一成、栗林宏三、後藤義民、小西美美枝、斎藤和夫、品川陸生、高田征男、高橋利道、瀧澤秀夫、田中 洋・雅子、田中昌子、田中 實、田中志司子、富樫啓一、富樫昌江、戸津高保、中正憲信、成沢里美、畑 正輔、濱野由美子、原 美保、広木朋子、辺見敦子、松岡祥子、松原寛直・敏子、村上茂夫、安 真一郎、山口和夫、横山加奈子 以上 36名

【担当幹事】松原寛直、中正憲信

ようやく開いた宮島沼

2006. 4. 23 江別市 松山 潤

雪の多かった今年、3月に入ってから暖気で一気に例年より早く雪解けが進むかなと思っていたところ、その後

の冷え込みで逆戻り、例年より遅いぐらいの沼開けとなった。完全に開いたのは4月の20日頃だという。周囲の畑にも残雪がたくさん見られ、例年の光景とは趣がやや違う。そういえば、来る途中の新篠津の融けたばかりの水田では、ぱっと見た目で数百単位のハクチョウ、マガンがいたるところに降りており、その数、全体ではおそらく万を越すのではなからうか。盛んに餌を探っていた。20年も宮島に通っているが、途中の新篠津にこれほどの数が降りているのを見たのは初めてである。宮島にはマガン3万程が畔をとりに来ているらしいが、日中は出かけていて少ししか見られなかった。その代わりというか珍しくカモメの大群が見られた。最近内陸で見られることが多いような気がする。江別では春先によく見られるし、4月越後沼では大きな鳥柱を作っていることもある。面白いのはトラクターが畑を耕すとその後に群がってカモメがついてゆく光景であろう。きっと出てきた虫が狙いだと思う。宮島でも沼から東側の畑でトラクターを追うカモメの大きな群れが見られ興味深かった。沼の周りでは戻ってきた草原の鳥なども結構見られ久しぶりに沢山の種類を確認できた探鳥会であった。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、マガモ、コガモ、カルガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カモメ、シロカモメ、ユリカモメ、キジバト、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、シジュウカラ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス 以上 31種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、荒木良一、石川勝祥、今村三枝子、岩崎孝博、白田 正、小川秀子、加藤千春、加藤文夫、川上、河東保憲・知子、木村正光、後藤義民、小堀煌治、坂本 綾、坂本しずく、品川睦生、高田征男、高橋京子、高橋研人、高橋 理、高橋かりん、高橋良直、田中 洋・雅子、戸津高保、長尾由美子、成澤里美、濱野由美子、早坂泰夫、松原寛直・敏子、松山 潤、村上トヨ、安 真一郎、山田登志恵、山田良造、横山加奈子、吉田慶子、吉村 望 以上 42名

【担当幹事】小堀煌治、戸津高保

野幌森林公園探鳥会

2006. 4. 30 江別市 徳田 和美

4月に入ってから気温の低い日が続いたのですが、今日は風も強くなく寒さの心配もなさそうです。福寿草の花が金色の光を放っているように真っ盛りです。歩きはじめて間のなくのことです。ウグイスが木の枝に止って鳴いている姿がはっきり見えます。渡り終えた直後にはこんな風に無防備な状態の姿を見ることができるとのことです。なんと幸運な出会いでしょうか。すっかりうれしくなりました。

カラ類の声があちこちでします。先頭集団の右手前方で何かをつかんで木の根元に飛び降りた鳥がいます。木の向う側にまわりこんだハイタカを戸津さんが見つけました。消え残った雪の上で小鳥らしい獲物の羽根を散らし、ひきちぎって食べているのが見えます。双眼鏡、スコープ等であれば興奮気味に眺めていましたが、ハイタカもそん

なギャラリーに何かを感じたのでしょうか、獲物の残りを持って飛び去りました。こんな風な自然の営みを実際に目のあたりにしたのは、はじめてのことでした。

水芭蕉、坐禅草、エゾエンゴサクが咲き、水辺にはエゾサンショウウオの卵、カエルの卵が見られ、カツラの紅い芽吹きが美しい。今年になってはじめて参加した探鳥会でした。

スコープをのぞかせて下さる人、鳥の居場所を教えて下さる人、鳴き声から名前を教えて下さる人、会員の皆様にいつも親切にいただき感謝しています。

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、ハイタカ、オシドリ、マガモ、オオジシギ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、コマドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、イカル、ニュウナイスズメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 34種

【参加者】青山洋子、赤沼礼子、阿部真美、荒木良一、今村三枝子、岩崎孝博、牛込直人、苅部栄一、河村美智子、北村方男、後藤義民、小西美美枝、齊藤正雄、品川睦生、高田征男、高橋利道、田中 洋・雅子、田辺 至、千葉久子、富樫啓一、徳田恵美・和美、戸津高保、長尾由美子、浪田良三、成澤里美、野坂英三、濱野由美子、原 美保、樋口孝城、藤田安信、藤田利子、辺見敦子、堀さち子、松原寛直・敏子、安 真一郎、山本和昭、横山加奈子、吉村亨子、渡辺 以上 42名

【担当幹事】後藤義民、松原寛直

利尻・礼文宿泊探鳥会に参加して

2006. 5. 2～5 札幌市中央区 宮崎 嵩司

伝統ある北海道野鳥愛護会に入会してはほぼ3年、札幌周辺の探鳥会を楽しませていただいております。ある時、会のホームページに掲載されている「礼文島に翼を休める鳥たち」(道場 好)を読み、いつか島を訪れてみたいと憧れていましたところ、この度の宿泊探鳥会に参加させていただき、その念願がかないました。今回私が体験した数々の感動のうち主なものを次に紹介いたします。

姫 沼

快晴の青空に白銀に輝く秀峰利尻富士に圧倒され、耳には野鳥のさえずりがこちよく入ってきました。利尻島在住の佐藤理恵さんのガイドで沼に向かって歩き始めるとまもなく「アッ、コマドリが」、「アッ、ルリビタキが」「イタチだ」歓声があがりました。下方の沢には雪が残り、岩や石の周辺で何羽も見ることが出来ました。樹の上ではミソサザイもさえずっていました。まもなく周囲1kmの沼が一望できるところへ出ると「キョ、キョ」とクマガラの鳴き声がかきこえてきました。枯れた大木に止まるクマガラの姿がスコープに美しく見え、鳴きながら沼を横切って対岸へ飛ぶ光景、水面ではオシドリのつがいの姿、ひっそりとした雰囲気が漂う姫沼ではありましたが、めずらしい野鳥たちを観察でき満足いたしました。

オタトマリ沼

島の南端にあるオタトマリ沼から見る利尻富士は、雪肌と岩が輝き急峻でより厳しく見えました。周囲のとどまつ越しに見る山容はスイスのアルプスのようであり、沼の中央部には10羽ほどのカモがのんびり羽を休めています。さっそく葦が生い茂る周囲の湿地帯へ。一周30分ほどの散策路を歩き始めると、ルリビタキの雄と雌が先導してくれました。「アオジだ」「タヒバリではないか」「アッ、トラツグミが餌をついばんでいる」「静かに、静かに」と声をひそめながら、とうとう所々に残雪のある道を一周してしまいました。北海道ではタヒバリは珍しいということもあって食事の後、リクエストで観察、撮影をしました。

利尻森林公園

針葉樹と落葉樹に遊歩道が整備されている広大な公園で2日目の午後と3日目の早朝に観察をしました。入り口で歓迎してくれた色鮮やかなマヒワ、枯れた高木で営巣しているクマガラ、樹の上でさえずり、また暗い林床で遊ぶコマドリ、上空にはツグミ、カシラダカ、カワラヒワの群れなど多くの野鳥を見ることができました。またホテルへの帰途、真近かで何羽かのノゴマのさえずる姿を長い間見せてくれたことは、大変印象的でした。

礼文島緑ヶ丘キャンプ場

島ご出身の道場さんの案内で最初に訪れた感動の場所です。高台から少し下がった所にキャンプ場、その奥に森に通じる道が見える。野鳥がにぎやかにさえずっていました。一同が横一線に並んでキャンプ場を見下ろすとなんと、50mほどの距離にヤツガシラ、トラツグミ、シロハラが歩いていました。スコープを並べて皆で息を呑んでじっくりと交互に観察し、探鳥会の醍醐味を味わうことこの上なしでした。

この後、久種湖、澄海岬、スコトン岬を案内していただき、満ち足りた気持ちと何時の日かまた訪れたい思いを強く感じた次第です。

フェリー上の探鳥、懇親会など

今回初めてのフェリー上の探鳥を体験しました。数千羽のハシボソミズナギドリ、ウトウ、一羽で頑張って飛んでいるメジロなど渡りの生態を観察できました。海を渡る野鳥のエネルギーは何なんだろう。何がそうさせているのだろうか。これまた感動的でした。



宿泊探鳥会 2006年5月3日 利尻富士町 オタトマリ沼

そして何といても宿泊探鳥会の楽しみは懇親会などの人との触れ合いです。山階鳥類研究所標本調査員の富川、小畑さんのお話は大変勉強になり、特に昨年ブッポウソウを礼文島で観察されたと聞き驚きました。南国からやって来るこの鳥は本州では近年ほとんど見られなくなりました。氷河時代野鳥たちは温かい環境を求めて渡りを始めたときいています。今また温暖化の時代「棲み良い環境を求めて力強く飛び続けている」のではないのでしょうか。野鳥たちよ頑張れ！エールをおくりましょう。

そしてこの探鳥会を通して日ごろの探鳥活動はもちろん、環境問題と保護についての議論、また会の草創期に活動されてこられた方々のご苦労話など、盛りだくさんの話をうかがうことができました。

最後になりましたがこの会を企画、実施されました役員、幹事はじめ同行の皆様にご心から感謝申し上げます。

【記録された鳥】アビ、オオハム、アカエリカイツブリ、ハシボソミズナギドリ、ハイロミズナギドリ、カワウ、ウミウ、ヒメウ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、マガン、ハクチョウsp.、オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、キンクロハジロ、スズガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、クロガモ、ミコアイサ、ウミアイサ、カワアイサ、トビ、オジロワシ、ハヤブサ、クサシギ、イソシギ、オオジシギ、ユリカモメ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミネコ、ミツユビカモメ、ウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメ、ウミオウム、ウトウ、ヤツガシラ、キジバト、アリスイ、アカゲラ、クマガラ、ヒバリ、ツバメ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、ミソサザイ、コマドリ、ノゴマ、ルリビタキ、ジョウビタキ、ノビタキ、イソヒヨドリ、トラツグミ、アカハラ、シロハラ、マミチャジナイ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、シロハラホオジロ、カシラダカ、ミヤマホオジロ、アオジ、クロジ、オオジュリン、アトリ、カワラヒワ、メジロ、マヒワ、ベニヒワ、ベニマシコ、ウソ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 92種

【参加者】赤沼礼子、池田みちえ、石井幸子、石橋和子、板田孝弘、岩崎孝博、大町欽子、片山 實・慶子、蒲澤鉄太郎、栗林宏三、河野美智子、小堀煌治、品川陸生、島田芳郎・陽子、清水朋子、白鳥恵子、高橋良直、田中志津子、道場 優・信子、徳田恵美、戸津高保・以知子、長尾由美子、中嶋慶子、中正憲信・弘子、成澤里美、西川喜久世、橋爪陽子、畑 正輔、濱野由美子、原 美保、広木朋子、松原寛直・敏子、道川富美子、宮崎嵩司、村上トヨ、安 真一郎、山田登志恵、山本昌子、横山加奈子

以上 45名

【担当幹事】蒲澤鉄太郎、清水朋子、道場 優、栗林宏三、戸津高保

藤の沢探鳥会に行って

2006. 5. 7 藤の沢小学校4年 山本 和

私は、初めて探鳥会に行きました。白鳥園から出発して、小鳥の村を通った時、遠くのえだに止まっている鳥を見つけました。急いでそうがんきょうで見たら、もういませんでした。

私は歩いていて、いろいろな鳥を見つけたけれど、一番わかりやすかったのが、コゲラでした。コゲラは、きつつきの仲間で、小さい鳥で、「コンコンコン」と音をたてて木をたたきます。探鳥会の3日前にも、家族であかん湖とくっしやろ湖に行った時、コゲラを見ました。かんこう客の人たちが、「何という鳥だろう。」「めずらしいな。」と話していました。私は、小鳥の村ではよく見る鳥なのになあと思いました。

ほかには、キジバト、メジロ、カケス、たくさんの鳥がいました。見つけられなかったけれど、鳴き声だけ聞こえた鳥もいました。私は、鳥だけではなく、植物や虫も見ました。

私は、こんな自然がいっぱいで楽しめる小鳥の村が、私

の学校のすぐそばにあって、とてもうれしいです。また今年、探鳥会に行つて自然のことを勉強したいです。

【記録された鳥】トビ、マガモ、キジバト、アリスイ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、モズ、コマドリ、ルリビタキ、クロツグミ、アカハラ、シロハラ、マミチャジナイ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キクイタダキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、コガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、ホオジロ、アオジ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、シメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス 以上 38種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、石橋 恭、板田孝弘、岩崎孝博、大表順子、勝俣由美子、勝俣征也、川東保憲・知子、工藤寛明、工藤舞音、工藤葉萌、工藤晶子、後藤義民、小西美美枝、小堀煌治、佐川貴美子、佐川雅之、佐々木裕、品川陸生、高田征男、田島千代子、田中 洋・雅子、谷口正美、富樫啓一、徳田恵美・和美、戸津高保、中正憲信・弘子、濱野由美子、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、村上茂夫、矢島一昭、安 真一郎、柳川 巖、山田良造、山吹孝史、山本 和、吉野昌子 以上 44名

【担当幹事】小堀煌治、戸津高保



【福 移】2006年7月2日(日)

草原や河畔林での夏鳥たちの繁殖が後半戦から終盤へとなり、巣立つてから間もない幼鳥が見られる時期です。カッコウの声を聞きながら、初夏の草原、河川敷、土手道でゆっ

くりと探鳥をします。

集 合：中沼青少年キャンプ場 午前9時

(集合場所が変わりましたのでご注意ください。)

交 通：地下鉄環状通東駅発 中央バス北札苗線

「福移小学校通」下車、徒歩5分

【野幌森林公園】2006年7月9日(日)、9月10日(日)

初夏と初秋の野幌森林公園を楽しみます。同じ鳥でも7月と9月では違う表情を見せてくれます。

集 合：野幌森林公園大沢口 午前9時

交 通：JR新札幌駅発 JRバス(文京台循環線)文京台南町下車。夕鉄バス(文京通西行)大沢公園入口下車、各徒歩5分

【鶴川河口】2006年8月20日(日)、9月3日(日)

鶴川河口付近の自然干潟や人工干潟でのシギ・チドリ類の観察が主目的です。

集 合：鶴川温泉「四季の館」駐車場 午前9時30分

交 通：札幌駅ターミナル、大谷地ターミナル発

道南バス浦河行(ペガサス号)「四季の館」前下車

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り行います。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具をお持ち下さい。

☆探鳥会の問い合わせ

北海道自然保護協会 011-251-5465

午前10時～午後4時(土・日祭日を除く)

鳥民だより

◆平成18年度野鳥写真展出展者・作品◆

荒木 良一	ハシジロアビ	カッコウ
片山 實	キジバト	オオソリハシシギ
小堀 煌治	マガン	オオルリ
笹森 繁明	ケイマフリ	
志田 博明	セイタカシギ	
渋谷 信六	アオサギ	コチドリ
高橋 良直	ハマシギ	エゾライチョウ
田向 一彦	フクロウ	
安 真一郎	クマゲラ	
山田 甚一	ゴジュウカラ	ウソ
山田 良造	ダイサギ	ピロードキンクロ
以上	11名	18点

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>